

島根県邑智郡瑞穂町

# 慶光坊遺跡(堀越城跡)発掘調査報告書

主要地方道吉田瑞穂線改良工事に伴う発掘調査



1995年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

# 序

瑞穂町は遺跡の町といわれるよう、多くの埋蔵文化財が町内各地に点在しております。これらの貴重な文化財の保存保護、活用のため、分布調査や発掘調査を実施しているところであります。

この度、主要地方道吉田瑞穂線改良工事に伴い、建設予定地内の慶光坊遺跡の調査を実施いたしました。調査の結果、中世の城跡をはじめとして貴重な資料を得ることができました。この報告書は、その調査結果をまとめたものであります、広く各方面でご活用いただければ幸いです。

なお、調査に当たりご指導いただいた広島大学文学部河瀬正利先生、島根県文化財保護指導委員吉川正氏、島根県教育委員会文化課をはじめ関係各位に対し深く感謝申し上げる次第であります。

平成7年3月

瑞穂町教育委員会

教育長 澤 田 隆 之

## 例　　言

1. 本書は鳥根県邑智郡瑞穂町大字山田310番地外における主要地方道占田瑞穂線の改良工事に伴い、平成6年5月16日から10月31日にわたって実施した慶光坊遺跡の発掘調査報告書である。なお、今回の調査において検出した城跡と思われる遺構については、字名から堀越城跡と称することとした。
2. 発掘調査は鳥根県川本土木建築事務所から委託を受け瑞穂町教育委員会が実施した。
3. 本報告書の執筆は河瀬正利氏の指導で、藤田睦弘が行った。
4. 本書の編集は藤田睦弘が行った。
5. 本書記載の図面作成は森岡弘典、藤田睦弘及び市山真由美が行った。
6. 本書掲載の遺構写真撮影は森岡弘典、藤田睦弘が行い、遺物写真撮影は古川健二が行った。
7. 本書掲載の地形図は国土地理院の承認を得て同院発行の25,000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。
8. 本書掲載の地形図に表示したX軸、Y軸は国上調査法による第III座標系の軸方向である。地形測量図、遺構実測図の矢印は磁北を示している。
9. 調査資料及び出土遺物は瑞穂町教育委員会で保管している。
10. 地形測量を㈱測地技研に、遺構実測の一部を㈱ワールド航測コンサルタントにそれぞれ委託した。

# 慶光坊遺跡（堀越城跡）発掘調査報告書

## 目 次

序	
	頁
I. 調査に至る経緯	1
II. 慶光坊遺跡（堀越城跡）の位置と環境	3
III. 調査区の概要と出土遺物	7
IV. まとめ	30

## 図版目次

図版第1	a. 調査区全景（上空から） b. 調査区遠景（東から） c. 調査区近景（南から）
図版第2	a. 堀越城跡から二ツ山城跡及び本城跡方面を望む b. 堀越城跡から宇山城跡群方面を望む c. 堀越城跡から南を望む
図版第3	a. 東側郭（南から） b. 西側郭（南から） c. 第1郭及び第5郭（北西から）
図版第4	a. 第11郭及び切岸（東から） b. 第4郭河原石分布状況（上空から） c. 同（同）
図版第5	a. 第8郭土層（北から） b. 堀切状造構（南東から） c. 石積造構（第2郭西側斜面）（北西から）
図版第6	a. 石積造構（第5郭北側斜面）（北から） b. 通路状造構（第1郭第2郭境界部）（東から） c. 同（第3郭西側）（北東から）
図版第7	a. 通路状造構（第3郭東側）（北西から） b. 同（同）（南東から） c. 同（調査区北端部）（東から）
図版第8	a. 段状造構（南から） b. SK-01（頭骨出土状況）（西から） c. 同（完掘状況）（南から）
図版第9	a. SK-02～SK-05（完掘状況）（上空から） b. SK-07（同）（北から） c. SK-09・SK-10（同）（南から）
図版第10	a. SK-11（完掘状況）（東から） b. SK-12（同）（南から） c. SD-01（同）（東から）
図版第11	a. SD-02・SD-03（完掘状況）（南から） b. SD-05（同）（西から） c. 旧水田面検出状況（北西から）
図版第12	a. 須恵器 b. 中国製磁器 1 c. 同 2 d. 陶器（肥前系）
図版第13	a. 陶器（肥前系） b. 同（同） c. 同（石見焼） d. 同（同）
図版第14	a. 陶器（石見焼） b. 磁器 c. 瓦及び海鼠瓦
図版第15	a. 磁器石検出状況 b. 五輪石 c. 現地説明会の様子

## 挿図目次

	頁
第1図 瑞穂町域と慶光坊遺跡（堀越城跡）位置図	2
第2図 慶光坊遺跡（堀越城跡）周辺の遺跡分布図(1:25,000)	5
第3図 発掘調査前地形測量図	9～10
第4図 発掘調査後地形測量図及び遺構配置図・第4郭河原石分布図	11～12
第5図 郭状遺構実測図（北側）・第1郭盛土部分土層図	13
第6図 郭状遺構実測図（南側）	14
第7図 第8郭土層図	15
第8図 第2郭・第5郭石積遺構実測図	15
第9図 通路状遺構実測図	17～18
第10図 段状遺構実測図	19
第11図 十坑実測図(1)	20
第12図 土坑実測図(2)	21
第13図 旧水田面上層図	22
第14図 須恵器実測図	23
第15図 中国製陶器実測図	23
第16図 陶器（肥前系）実測図	24
第17図 陶器（石見焼）実測図(1)	25
第18図 陶器（石見焼）実測図(2)	26
第19図 磁器実測図	27
第20図 瓦及び海鼠瓦実測図	28
第21図 墓標石拓本	29
第22図 五輪石実測図	29

## 表 目 次

第1表 溝状遺構計測表	22
-------------	----

## I. 調査に至る経緯

主要地方道吉田瑞穂線は瑞穂町と広島県吉田町を結ぶ幹線道路であり、道路改良も進み中国縦貫道に接続していることから近年交通量が大幅に増加している。しかしながら、道路脇に民家が連なり幅員も狭小な瑞穂町出羽地内においては、交通量が増加するに従って生活環境が悪化し、住民から強く道路改良の要望がなされていた。これに応えるため島根県川本土木建設事務所はバイパスの建設を計画し、平成5年度から事業を進めてきた。

このバイパスの建設にあたり、瑞穂町教育委員会に建設予定地の住民から建設予定地の一部が遺跡ではないかとの通報があった。急速現地調査したところ中世の遺跡であることが判明し、島根県文化課及び島根県川本土木建築事務所とその取り扱いについて協議を行った。協議の結果、バイパスの公共性と工事の進捗状況を考慮すると当該地域の工事もやむをえないと判断し、発掘調査を行うこととした。

ところで、今回の調査は主要地方道の改良に伴うものであるので本来ならば島根県教育委員会で行ってもらうのが適切であった。しかし、川本土木建築事務所が島根県土木部を通して島根県教育委員会に発掘調査の依頼をしたところ、他にも多くの事業があり早急に調査を行うことは不可能とのことであった。そこで、再度瑞穂町教育委員会と川本土木建築事務所で協議を行い、やむなく瑞穂町教育委員会が主体となって発掘調査を行うことになったのである。

調査は平成6年5月16日から10月31日まで次の調査体制で実施した。

調査主体 瑞穂町教育委員会

調査員 森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

藤田睦弘（瑞穂町教育委員会主事）

調査指導 河瀬正利（広島大学文学部助教授）

村上 勇（広島県立美術館主任学芸員）

古川 正（島根県文化財保護指導委員）

川原和人（島根県文化課主幹）

熱田貴保（島根県文化課主事）

事務局 澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）

山本忠徳（瑞穂町教育委員会教育課長）

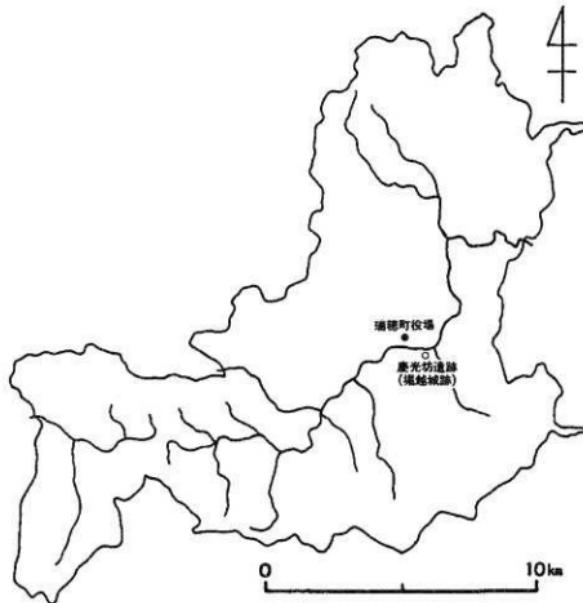
星野暢子（瑞穂町教育委員会課長補佐）

平川 進（瑞穂町教育委員会課長補佐）

発掘作業 荒瀬義人 石川義明 岩根 諭 井坂慎子 植田義夫 上川義夫 漆谷 勉  
上田弥生 大畑義美 尾崎文江 国信勇之進 品川コミツ 津派軍太郎  
高橋一男 田中繁人 高川秀夫 竹添繁人 高梨数男 戸津川里美 戸津川孝夫  
平川正寅 日高シズヨ 日高フミエ 日高スエノ 久光花枝 古川健二  
松江 登 松島利郎 三上福三 三上 巧 三上カメノ 森田ユキエ 山本康久  
山崎フジヨ 徳田和泰

整理作業 古川健二 市山眞由美 上木和枝（瑞穂町教育委員会）

なお、調査にあたって桑野直夫氏、木邑恂氏、宮永公美氏、山本史朗氏、三上憲昭氏、井坂猛氏、奥田真隆氏（以上瑞穂町文化財保護審議会委員）、振井久之氏（大和村教育委員会）、中田健一氏（石見町教育委員会）の方々から広範なご教示をいただいた。また、島根県川本土木建築事務所には、発掘調査を円滑に進めるために多大なご配慮とご協力をいただいた。記して謝意を表したい。



第1図 瑞穂町域と慶光坊遺跡（塔越城跡）位置図

## II. 慶光坊遺跡（堀越城跡）の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県中央部の邑智郡南部に位置する。南西には中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。町域のほぼ中央を出羽川が東流し、その出羽川に向かって亀谷川、岩屋川、円の板川などの支流が注いでいる。出羽川とその支流の流域には沖積地や河岸段丘が形成されている。特に瑞穂町田所から出羽にかけての出羽川の両岸には河岸段丘が発達し、段丘の間には出羽盆地が広がっている。中でも出羽盆地の中央付近には規模の大きな河岸段丘が形成され、段丘上の平坦部には集落がつくられている。

慶光坊遺跡は出羽盆地東端部南側の河岸段丘から北に突き出した尾根の先端部に位置する。尾根は低地からの比高20m程度であるが、二ツ山城をはじめ本城跡、宇山城跡群等町内の主要な山城跡を見渡すことができる。また、本遺跡周辺の水田は圃場整備を行う前はたいへんな湿地であったと伝えられているが周辺に矢田ヶ池という字名が残っていることからみても、かつて本遺跡周辺は相当の湿地であったと思われる。

瑞穂町は遺跡分布調査がすでに終了しており、分布調査終了後に明らかになったものを含め550ヶ所以上の遺跡が確認されている。その半数以上の約300ヶ所が製鉄関連遺跡であるが、横道遺跡をはじめとして旧石器時代から歴史時代にわたる幅広い時代の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代の遺跡は、横道遺跡（高見）、荒横遺跡（岩屋）及び堀田上遺跡（市木）の3ヶ所が知られている。横道遺跡では始良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土している。荒横遺跡では安山岩製の尖頭器状石器と削器が表面採集されている。また、堀田上遺跡からも流紋岩製のナイフ形石器、台形様石器及びスクレイパーなどが出土している。

続く绳文時代の遺跡としては、以前より横道遺跡、長尾原遺跡（淀原、下龜谷）、大畠遺跡（大草）及び大字根遺跡（伏谷）が知られていたが、近年行われた中国横断自動車道広島浜田線建設に伴う発掘調査により新たに郷路橋遺跡（市木）、今佐屋山遺跡（市木）、堀田上遺跡の存在が明らかになった。また、1992年に調査された川ノ免遺跡（山田）からも押型文土器が出土している。

弥生時代では、石堂遺跡（谷川）、川ノ免遺跡、淀原遺跡（淀原）、長尾原遺跡、順庵原遺跡（下龜谷）、野田西遺跡（上龜谷）、牛塚原遺跡（上龜谷）、堀田上遺跡などがある。これらのうち、淀原遺跡、順庵原遺跡、牛塚原遺跡、堀田上遺跡からは弥生時代前期の土器が出土している。

弥生時代終末期になると共同体の首長墓と考えられる順庵原1号墳墓（下龜谷）及び御華山墳墓（鱗渕）が築造されている。順庵原1号墳墓は出羽川南側の河岸段丘上にあり、わが国で初めての四隅突出型墳墓の調査事例となった。また、御華山墳墓は鱗渕集落背後の丘陵上にあり、鱗渕古墳群の西に隣接している。この墳墓は封土がなく、縦2.8m、横1.3~1.5mの墓坑内に箱式石棺がつくられており、内には頭骨、上腕骨等が残っていた。

古墳時代の遺跡のうち、集落跡としては猿原遺跡（和田）、宇山遺跡（上原）、川ノ免遺跡、長尾原遺跡、順庵原遺跡、今佐屋山遺跡などがある。このうち、1968年に調査された長尾原遺跡からは竪穴住居跡や土坑墓が検出され、さらに鉄に関する遺構が発見された。また、1989年に調査された今佐屋山遺跡からも竪穴住居跡と製鉄遺構がみつかっており、製鉄・鍛冶が古墳時代後半には始まっていたことを示している。

古墳は60基以上が確認されているが、その大部分は終末期に築造された小円墳と横穴である。前半期の古墳と思われるものには段ノ原古墳（高見）、淀田古墳群（三日市）及び御華山古墳群がある。

このほか、古墳時代から奈良、平安時代にわたる須恵器の窯跡も数多く確認されている。久永古窯跡群はその代表的な遺跡で、18基以上の窯跡で構成されている。島根県内有数の須恵器産地であったといえる。

中・近世になると、山城や砦跡、そして多くの製鉄遺跡が確認されている。山城では鎌倉時代に富永（出羽）氏が築城したといわれる二ツ山城跡や宇山城跡群（毛城、赤城、白鹿城、信友城、樹光城、十俵城）をはじめ高橋氏、本城氏の本城跡、別当城跡、小笠原氏の布施城跡、錢宝城跡、堀氏の堀城跡などが確認されている。

二ツ山城跡は瑞穂町に所在する山城の中では最大規模を誇り、その築城は貞応2年（1223年）と伝えられ、益田七尾城跡（1193年）について石見国では二番目に古い山城であると言われている。東西方向に對峙する二つの最高所は東の丸（522.0m）、西の丸（530.8m）と呼ばれ、それらを中心に泉水の段、お藏の段、馬場、駄屋の段など多くの郭群や加工段、土塁、空堀、堅堀が良好な状態で残されている。1989年の二ツ山城跡南側山腹部の堅堀跡確認調査によると、堅堀は幅8m、深さ5mもあり、その規模からしてしっかりしたつくりの城であったことがうかがえる。

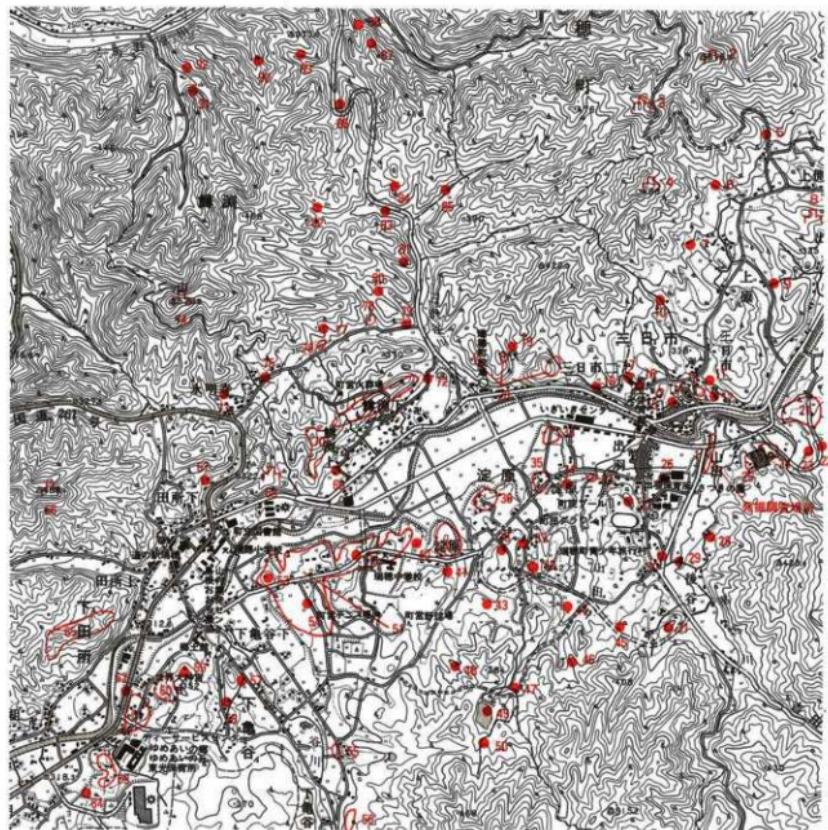
本城跡は邑智郡羽須美村阿須那に本営を置く高橋氏が築いた城で標高480mの独立した丘陵上に位置している。享禄2年（1529年）毛利氏により滅亡するまでの居城とされている。頂上の削平地（本丸）は高橋氏滅亡後毛利氏が堀切によって破壊している。

別当城跡は、高原地区和田集落背後の標高437.3mの丘陵上に築城された山城で、頂上より西及び南北に向かって派生する尾根上に20数余の郭が設けられている。瑞穂町内では二ツ山城や本城について規模の大きな山城跡であり、永禄元年（1558年）毛利氏と尼子氏の合戦の舞台となった城と伝えられている。

この時代の製鉄関係遺跡は、鉄跡や大鐵冶屋跡が数多く分布する。また、砂鉄採集の鉄穴場跡、切羽跡は瑞穂町全域に分布しており、製鉄が盛んに行われていたことがうかがわれる。その豊富で良質な鉄資源を背景に中世から近世にかけて多くの刀工が存在していたことが知られている。その中には相州正宗十哲の一人、初代山羽直綱など著名な刀工も輩出している。

また、鎌倉時代初期に瑞穂町久喜地区に鉱脈が発見され、明治に至るまで銀、銅、鉛等の鉱物を産出した。鉱山跡周辺には上千軒、下千軒などの言い伝えがあり、多くの寺院跡が地名として残っていることから、最盛期にはかなりの人口であったと思われる。

江戸時代瑞穂町は浜田藩と銀山領（天領）に属し、市木と出羽には浜田藩の代官所が置かれた。このころになると、鉄製鉄も最盛期を迎え、特に「山羽鋼」と呼ばれる良質の鋼を産出し全国に供給していたことが知られている。



第2図 麗光坊遺跡(堀越城跡)周辺の遺跡分布図(1:25,000)

- |                     |               |             |            |              |
|---------------------|---------------|-------------|------------|--------------|
| 1. 麗光坊遺跡            | 19. 石井追窓跡     | 38. 前曾根瓦窓跡  | 57. 亀谷八幡宮跡 | 76. 清水ヶ戻遺跡   |
| 2. 白鹿城跡             | 20. 淀田古墳群     | 39. 若林遺跡    | 58. 牛市原遺跡  | 77. 清水ヶ戻窓跡   |
| 3. 赤城跡              | 21. 狐原道跡      | 40. 道場遺跡    | 59. 地蔵院跡   | 78. 馬場ヶ谷B遺跡  |
| 4. 毛城跡              | 22. 狐原剣跡      | 41. 板屋裏瓦窓跡  | 60. 駒鹿原A遺跡 | 79. 馬場ヶ谷A遺跡  |
| 5. 鉄穴原剣跡            | 23. 狐原上遺跡     | 42. 秋広瓦窓跡   | 61. 駒鹿原B遺跡 | 80. 馬場ヶ谷窓跡   |
| 6. 宇山A遺跡            | 24. 布遺跡       | 43. 江迫横穴群   | 62. 駒鹿原墳墓群 | 81. カニケ追跡    |
| 7. 宇山窓跡             | 25. 川ノ先遺跡     | 44. 泥陸遺跡    | 63. 出張遺跡   | 82. 桜ヶ谷窓跡    |
| 8. 信友城跡             | 26. 出羽代官所跡    | 45. 光明坊1号間歩 | 64. 正仏遺跡   | 83. 定入窓跡     |
| 9. 宇山B遺跡            | 27. 行村行グランド窓跡 | 46. 浪ヶ谷窓跡   | 65. 南古墳群   | 84. 定入跡      |
| 10. 横谷遺跡            | 28. 小谷道跡      | 47. 大堤下剣跡   | 66. 本城跡    | 85. 上曾窓跡     |
| 11. 大畑瓦窓跡           | 29. 鉄穴内遺跡     | 48. 江迫窓跡    | 67. 増屋横穴   | 86. ロク谷窓跡    |
| 12. 七神社社務所裏<br>石椎墓群 | 30. 稲荷神社跡     | 49. 泥原大堤剣跡  | 68. 副城跡    | 87. 道ヶ谷B窓跡   |
| 13. 宮ヶ谷遺跡           | 31. 光明坊2号間歩   | 50. 後鉄穴窓跡   | 69. 竹前遺跡   | 88. 道ヶ谷A窓跡   |
| 14. 阿旁寺堂跡           | 32. 福音寺跡      | 51. 長尾原遺跡   | 70. 御幸山古墳群 | 89. コオギヤスミ窓跡 |
| 15. 崇聖寺原遺跡          | 33. 小経堂遺跡     | 52. 長尾原剣跡   | 71. 鶴瀬古墳群  | 90. 矢ヶ谷窓跡    |
| 16. 蛇池遺跡            | 34. 高見屋横瓦窓跡   | 53. 長尾原A古墳群 | 72. 原下遺跡   | 91. 後友大鐵治屋跡  |
| 17. 大西瓦窓跡           | 35. オセド遺跡     | 54. 長尾原B古墳  | 73. 剣迫剣跡   | 92. 後友剣跡     |
| 18. 才の神瓦窓跡          | 36. 清原遺跡      | 55. 杉谷遺跡    | 74. ニッ山城跡  |              |
|                     | 37. 清原古墳      | 56. 杉谷古墳群   | 75. 永明寺跡   |              |

## 註

- (1). 河瀬正利『桃造遺跡－詳細分布調査報告－』瑞穂町教育委員会 1983年。
- (2). 吉川正「瑞穂町の遺跡」『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会 1976年。
- (3). 島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 堀田上・今佐屋山・米熊山遺跡の調査』1991年3月。
- (4). (2)に同じ。
- (5). 島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 III』1991年3月 同上 IV 1992年3月。
- (6). (3)に同じ。
- (7). 瑞穂町教育委員会『川ノ免遺跡発掘調査概要書』1992年6月。
- (8). 瑞穂町教育委員会『御幸山癒生式培墓調査概要』1969年2月。
- (9). 島根県川本農林土木事務所『農免道路新設に伴う長尾原遺跡及長尾原一号墳調査概要』1969年2月。
- (10). (3)に同じ。
- (11). 1987年に瑞穂町文化研究会が実施した地形測量図による。
- (12). 吉川正「多目的保安林総合整備事業に伴う二ヶ山城跡認定確認調査概報」瑞穂町教育委員会 1992年6月。

なお、上記参考文献以外に『瑞穂町誌』第1集、第2集及び第3集(1964年、1966年、1976年)を参考にした。

### III. 調査区の概要と出土遺物

#### 1. 調査区の概要

慶光坊遺跡は古くより寺院跡として伝えられているが、寺院跡と伝えられる削平部分は現在公園となっているほか、それに連なる尾根もかつては畠であったが長く耕作されておらず調査着手時に竹林となっていた。しかし、尾根の一部が県道になっている他は古い地形が残っており、尾根上やその両脇にいくつかの平坦面が確認できた。

調査区は道路工事の影響を受ける尾根全体に設定した。

本調査では遺跡が城跡であったことも明らかになった。またこれらのほか、近世の造構も検出した。以下その概要を報告する。

#### 2. 造構及び出土遺物

##### a. 造構

###### 堀越城跡

###### 郭状造構（第4図、図版第3a～4a）

尾根の頂上部を削平して大きな平坦面をつくり、さらにその東側に1段、西側に2段の平坦面を設けている。頂上、両脇とも平坦面は段差または通路状造構で区切られており、頂上部に3ヶ所、東側に2ヶ所、西側上段に3ヶ所、西側下段に3ヶ所の合計11ヶ所の郭状造構を確認した。

###### 第1郭（第5図、図版第3c）

尾根が最も広がったところを削平してつくった幅約21.0m、長さ約22.5mの平坦面で、今回調査を行った部分では最大のものである。第2郭とは通路状造構で区分され、その通路状造構で第4郭と結ばれている。また、平坦面西側にも通路状造構があり、第5郭と結ばれている。平坦面の北側は堀切状造構の切岸であり地山を掘削して高さ約4.0mの崖となっている。

平坦面上に建物跡等は確認できなかったが、上坑と溝状造構を検出した。さらに平坦面の周縁部では削平した土を盛土して平坦面の面積を広げているのが確認できた。

###### 第2郭（第6図）

第1郭南側の尾根の幅がせばまつた部分に作られた平坦面で幅は約5.6～12.4m、長さは約22.4mである。第1郭との間には通路状造構があり、第3郭との間には約60cmの段差がある。また、平坦面西側では盛土により平坦面を広げている。

###### 第3郭（第6図）

第2郭南側にあり、今回の調査区の南端部に位置している。幅約7.0～14.0m、長さ約24.0mの平坦面である。南側中央部で最高50cmのクランク状の段差を検出し、その東側から上坑と溝状造構を検出した。上坑は近代の肥料壺と思われ、この段差は近代になって作られたものである可能性が高い。

###### 第4郭（第4・5図、図版第4b・c）

第1郭及び第2郭の東側約1.6m下にある幅約4.4～5.0m、長さ約29.0mの平坦面である。南側の通路状造構により第1郭及び第2郭と結ばれている。

性格は不明であるが、平坦面全体に徑数cm～40cm程度の河原石が分布している。

#### 第5郭（第5図、図版第3c）

第1郭の北西側約1.7m下にある平坦面である。西側で通路状遺構により第1郭と結ばれている。形状は幅約1.4～4.6m、長さ約29.0mの帯状で、幅の広い部分は盛土によって平坦面を広げており、端部には補強の石積がみられる。

#### 第6郭（第5図、図版第3b）

第5郭と第7郭の間にある小規模な平坦面である。

#### 第7郭（第6図、図版第3b）

第1郭、第2郭及び第3郭の西側約3～4.0m下部にある帯状の平坦面である。幅は約0.7～4.0m、調査区内で長さは約42.0mあり、さらに調査区外へ続いている。

#### 第8郭（第6・7図、図版第5a）

第7郭の西側約1.75m下部にある幅約1.15～3.5m、長さ約9.2mの平坦面である。土層観察により旧斜面上に盛土して平坦面を作っていると確認された。

#### 第9郭（第6図、図版第3b）

西側の平坦面では一番低い位置にあり、第1郭からは約6.0m、第8郭からは約50cm下部にあり、幅約1.2～5.6m、長さ約9.8mの平面台形状の平坦面である。

#### 第10郭（第5図、図版第3b）

第5郭の約2.75m下部にあり、幅約1.4m～2.0mの帯状の平坦面である。

#### 第11郭（第5図、図版第4a）

第1郭北東端部の切岸下約4.0mにある平坦面で、堀切状遺構の底部平坦面からは約1.0m高い位置にある。崖となった部分を掘り込んで幅3.0～5.0m、長さ約4.5mの平坦面が作られ、周りの三面は地山で囲まれた格好となっている。

#### 堀切状遺構（第3・4図、図版第5b）

調査区内に2ヶ所の堀切状遺構を検出した。

このうち1ヶ所は調査区北端にあるかつて慶光坊という尼寺跡であったと伝えられ、現在農村公園となっている平坦部分と県道となっている尾根の間にある。地山であるやや風化した花崗岩を掘って作られており、規模は長さ約12.0m、深さ約1.5mである。

もう1ヶ所は、現在県道となっている尾根と、第1郭から第3郭のある尾根との間に作られている。規模は長さ約29.0m、高低差は北側で約2.75m、南側で約6.2mである。堀切底部が台形状の平坦面となる箱薬研の堀となっている。一部平坦面西側に旧地形が残っていたほかは、大部分が地山を削平したり埋め立てたものである。

#### 石積遺構（第8図、図版第5c・6a）

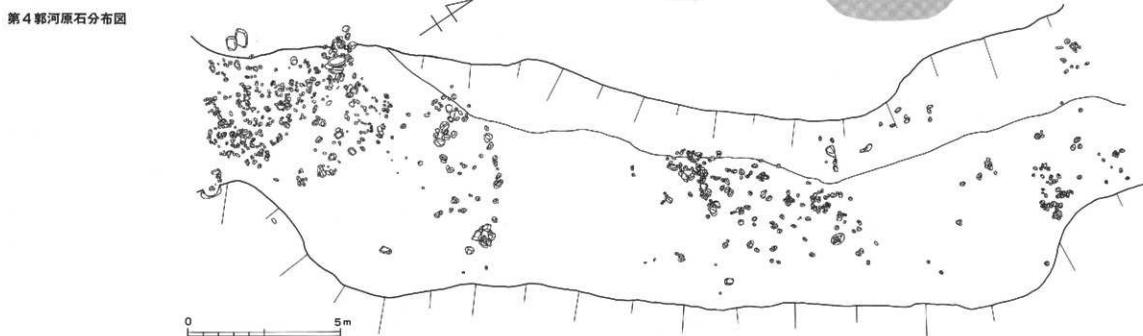
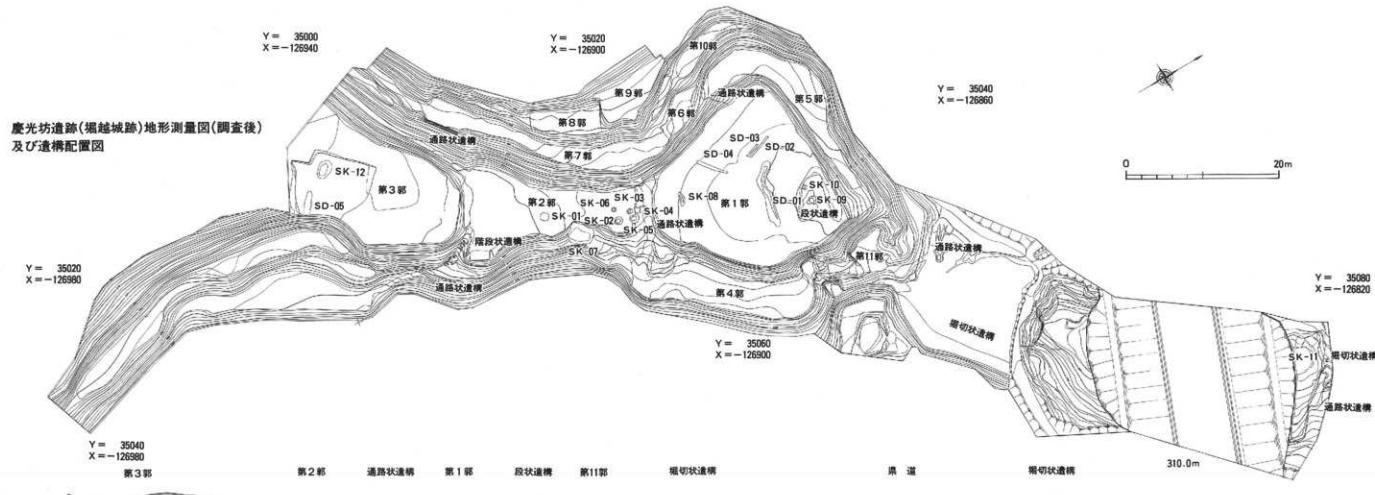
第2郭西側斜面と第5郭北側斜面上に石積遺構を検出した。両遺構とも傾斜した旧地形上に土を盛って平坦面を拡張する際に盛った上が崩れるのを防ぐために築かれたものと考えられる。

#### 第2郭西側斜面

第2郭西側約11.0mにわたり郭上端部から約90cmの間に90ヶ以上の石が積まれていた。石は径10cmから30cm程度のものが使われており、40cmを越えるものは数個しかない。石積には特に補強等は施されておらず、斜面下部にある石は上部の石積遺構から崩れ落ちたものと思われる。

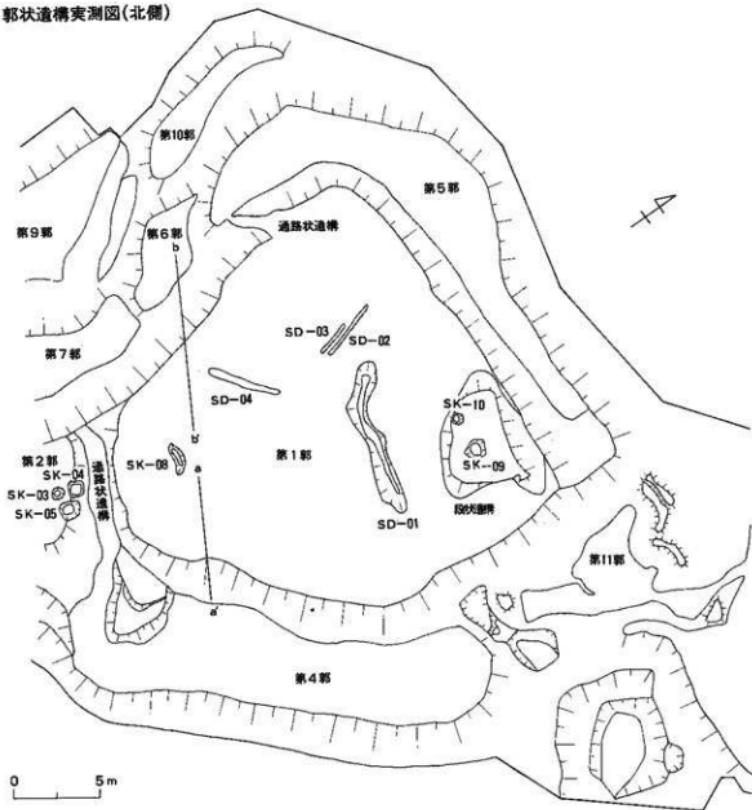


第3図 群馬調査前地形測量図

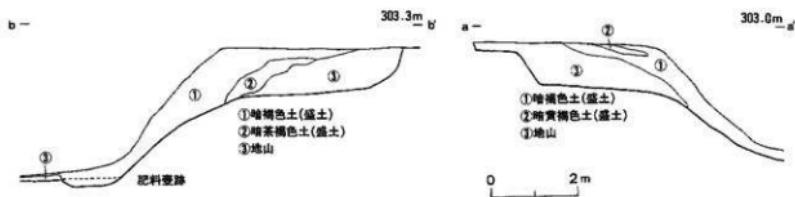


第4図 発掘調査後地形測量図及び造構配置図・第4郭河原石分布図

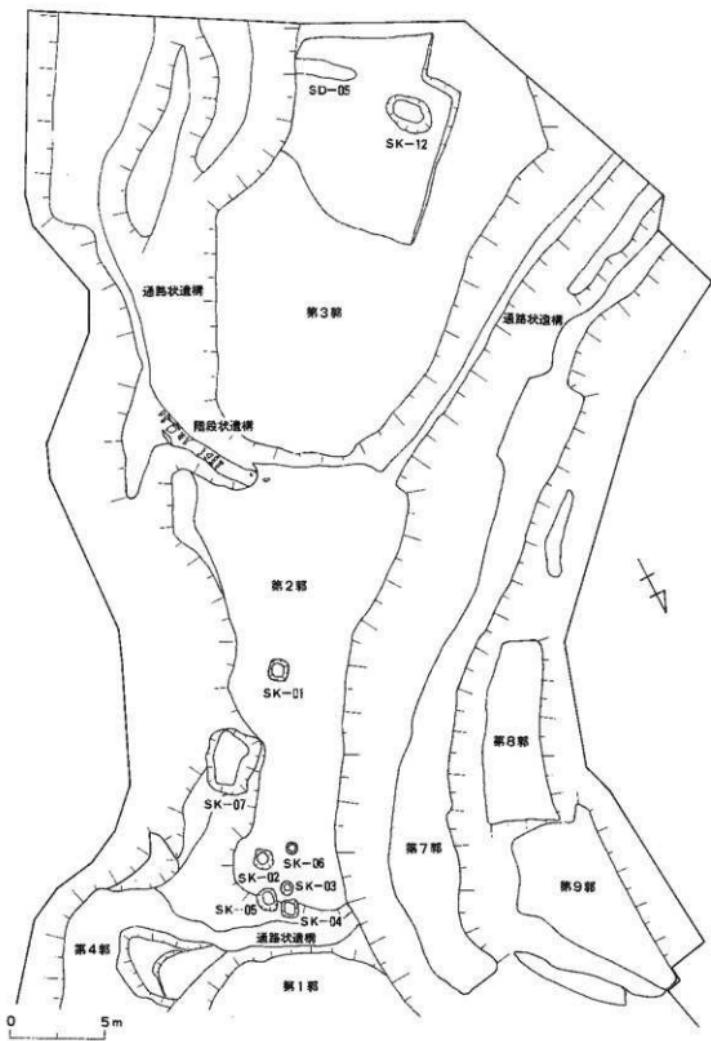
郭状造構実測図(北側)



第1郭盛土部分土層図

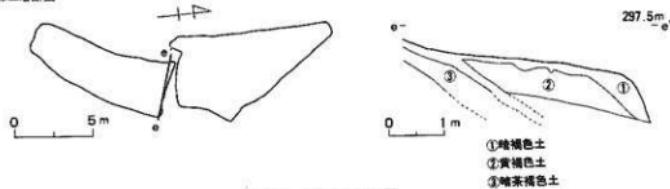


第5図 郭状造構実測図(北側)・第1郭盛土部分土層図



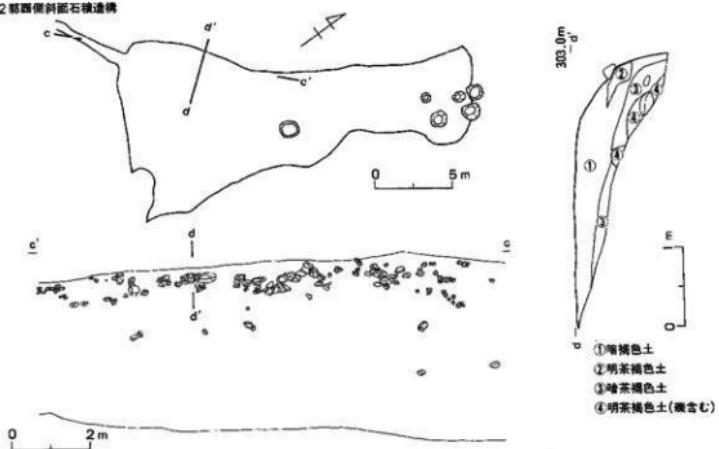
第6図 部状遺構実測図（南側）

第8郭土層断面

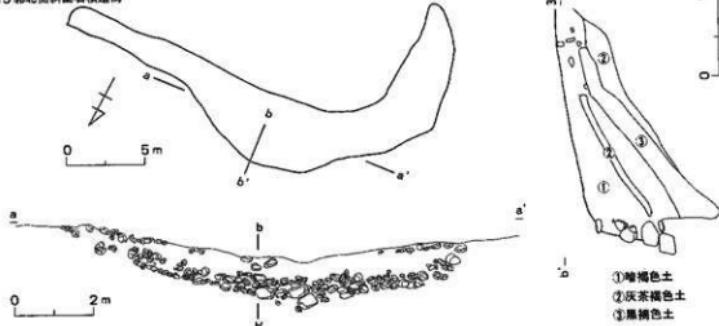


第7図 第8郭土層図

第2郭西便斜面石積遺構



第5郭北側斜面石積遺構



第8図 第2郭・第5郭石積遺構実測図

## 第5郭北側斜面

第5郭北側斜面の中央部約10.4mにわたり、斜面上端部の形状に従って石が積まれていた。石積の厚さは最も厚いところで約90cm、薄いところで約40cmであった。石はほとんど径10cm～30cmのものが使われており、最大のものでも径50cm程度であった。この石積に特別に補強等は施されてはいないが、中央部に径40cm以上の石が集められており、施工時に強度についての配慮がなされたいたようである。

### 通路状造構（第5・6・9図、図版第6b～7c）

第1郭西側、第1郭、第2郭境界部、第3郭東側及び西側、堀切状造構底面、調査区北端部にそれぞれ通路状造構を確認した。

第1郭西側通路状造構は第1郭西側と第5郭南西端部を結ぶ通路状造構である。幅は約40cmで高低差は約1.7mである。

第1郭、第2郭境界部の通路状造構は、第1郭と第2郭を隔て第4郭から第1郭及び第2郭へと通じる通路状造構である。長さは約10.8m、幅は約1.0mである。

第3郭東側通路状造構は、第3郭東側の尾根下から第2郭南端部に登るためのもので、中央の平坦面まで尾根を横切って緩やかに登り、そこから直接斜面方向に登り、この部分には階段状に石が敷かれている。造構全体の規模は幅約60～80cm、長さ17.0m、高低差4.5mである。このうち階段状造構部分は高低差2.2mの間に9段あり、便宜上低い方から第1段とする。段の間隔は13cm～62cmであるが、第5段と第6段の間隔だけ62cmで他はすべて13cm～32cmであるので、第5段と第6段の間にはさらに1段ないし2段あった可能性がある。石は径約10cm～30cmのものを使用している。

第3郭西側通路状造構は第2郭南端部から第3郭西側の斜面部を通り尾根の斜面を横切って調査区外へ続いている。調査区内で造構の長さは20.8m、幅約0.5～1.0m、高低差1.2mであった。

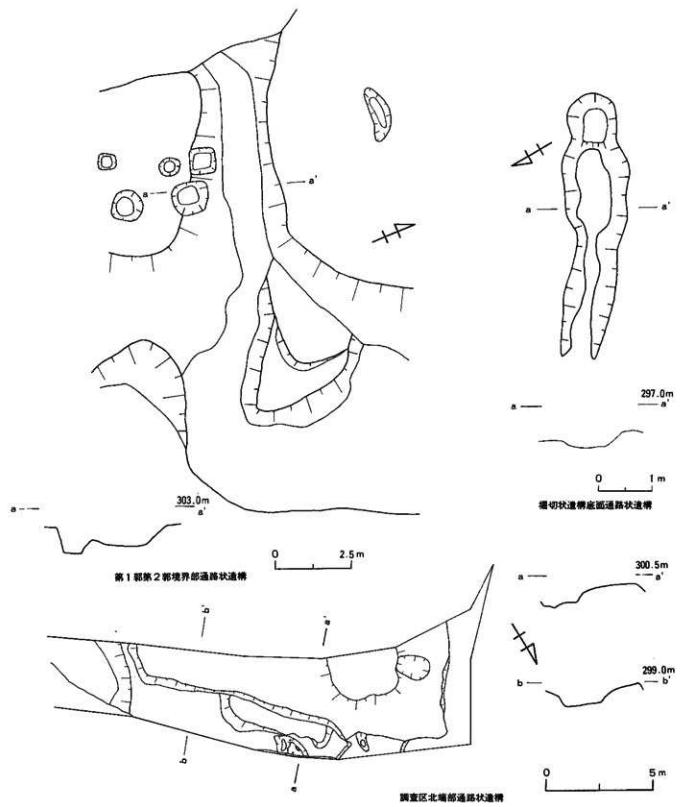
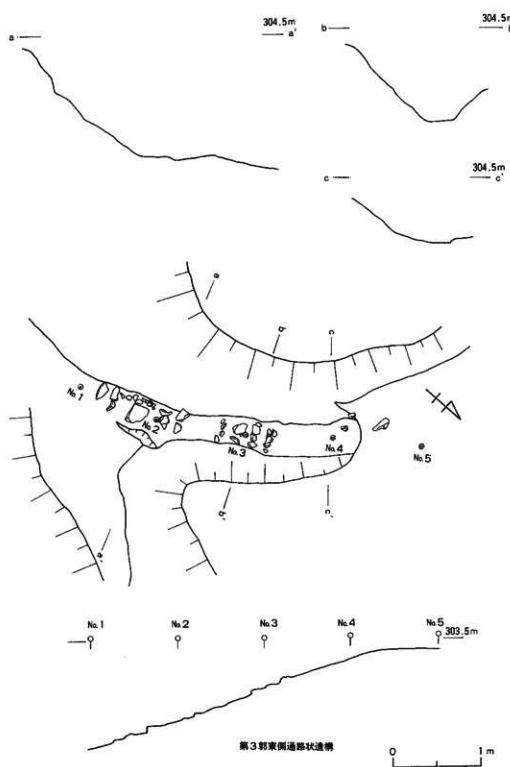
堀切状造構底面の通路状造構は、堀切状造構底面西端を掘りこんだ造構で、長さ約5.0m、幅0.78～1.24m、深さは0.12～0.26mであった。堀切状造構底面ではここからしか通路状造構を検出できなかったが、この部分は水田を作るために掘削等を行っていない部分である。底面東側は水田を作るためにかなり削平されており、かつては底面東側にもこの通路状造構がつながっていた可能性もある。

調査区北端部通路状造構は調査区北端堀切状造構の底部東側で検出した。調査区の境界部のため造構の一部のみの調査となつたが、長さ約11.0m、調査区内で幅2.3mにわたり地山を約40cm掘削している。

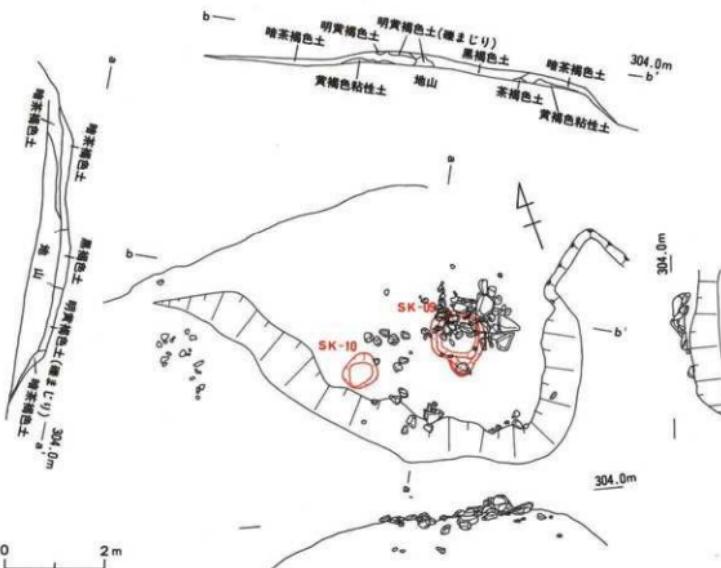
### その他の造構

#### 段状造構（第10図、図版第8a）

第1郭北東隅部から郭面より0.6～0.8m高くなつた平坦面を検出した。平坦面上には径数cmから50cm程度の石が密集し、さらに平坦面上から2基の土坑を検出した。土の堆積をみると、約10cm～30cmは暗褐色系の上が堆積しており、その下は地山となつてゐる。結果として段状造構の地山面は、第1郭の平坦面より約0.4～0.5mの高まりとなつてゐる。第1郭の平坦面造成の際、意図的に削り残されたと思われるが、目的は不明である。



第9図 通路状造構実測図



第10図 段状遺構実測図

#### 土坑（第10～12図、図版第8 b～10 b）

調査区内から13基の土坑を検出した。

##### SK-01

第2郭の平坦面のほぼ中央に掘られた土坑墓である。形状は隅丸長方形で長径104cm、短径80cm、深さ112cmであった。土坑の上半分には10～20cm程度の石が詰まっていたほか、鉄釘と人骨の一部が出土している。

##### SK-02

第2郭の北隅にまとめて存在する4基の土坑墓の一つである。径は約105cm～110cm、深さは65cmであり、底部東隅に径約35cmの石が残っていた。

##### SK-03

SK-02の北側約2.0mに位置し、径約68cm、深さ54cmで中から鉄釘が出土している。

##### SK-04

SK-02の北側約3.0mに位置し、径約92～96cm、深さ70cmで鉄釘が出土している。

##### SK-05

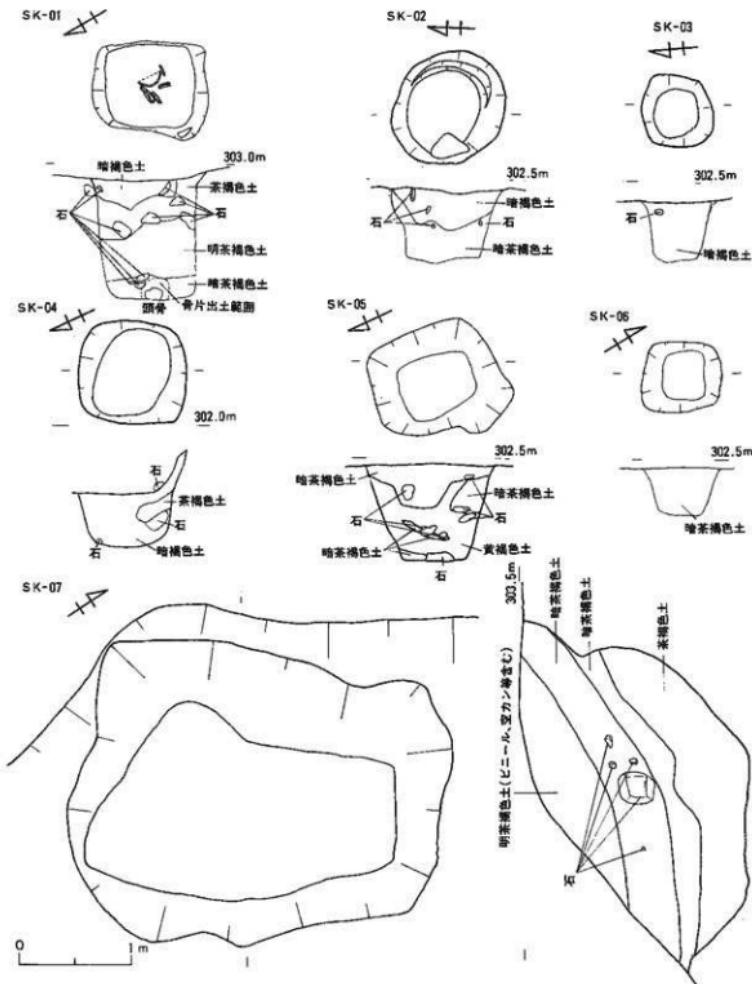
SK-02の北側2.1mに位置し、径100～115cm、深さ88cmである。土坑内からは径10cm～30cm程度の石が10数ヶがみつかっている。

##### SK-06

第2郭北側にある土坑である。形状は径約60cmの方形で、深さ約40cmである。

### SK-07

第2郭東端部に掘られた調査区最大の土坑である。平面形は長方形で規模は長径3.4m、短径2.7mで、深さは斜面上部で1.6m、斜面下部で0.42mである。遺物等の出土はなく、土坑の性格は不明である。



第11図 土坑実測図(1)

SK-08

第1郭南側にある土坑で、長さ約190cm、幅約70cm、深さ約30~50cmである。

SK-09

第1郭段状造構上の中央やや東よりに掘られた十坑墓である。形状は隅丸長方形で、長径110cm、短径94cm、深さ106cmである。土坑内上部からも径数cmから20cm程度の小石が20ヶ出上しているので、これらが墓標石であったのかもしれない。棺に使われたと思われる鉄釘も出土している。

また、段状造構表面に径数cmから50cm程度の石が60ヶ以上密集しており、幕標石と思われたが、土坑の位置と若干ずれて置かれているため土坑との関係は不明である。

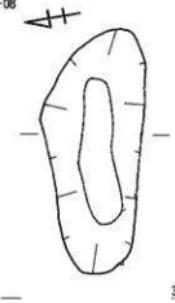
SK-10

第1郭段状造構上の南西隅に掘られた土坑で、径60~72cm、深さ29cmである。

表面に石等はなかったが、土坑内からは径数cmから20cm程度の小石が10ヶみつかっており、こね鉢と思われる陶器の破片も出土している。また、土坑の底部には炭化物が厚さ2cm、その下には焼土が厚さ2cmほど堆積している。

このほか十坑内から出土した陶器と同一個体の陶器が土坑から約20m離れた第4郭から出土している。

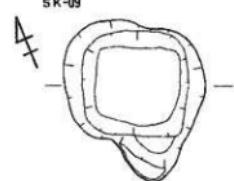
SK-08



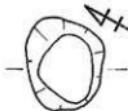
303.5m

暗茶褐色粘性土

SK-09

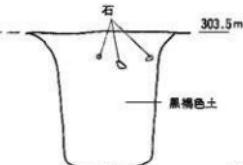


SK-10

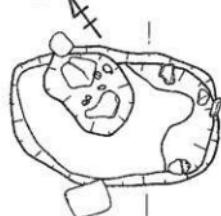


303.0m

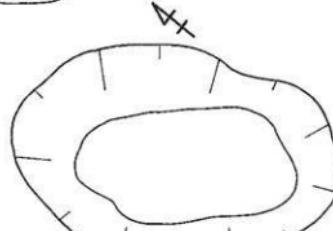
暗茶褐色土  
炭化物  
茶褐色土(燒土)



SK-11



明茶褐色土(炭化物含) 303.5m  
石  
茶褐色土  
白褐色土  
暗茶褐色土



SK-12

0 1.0m

第12図 土坑実測図(2)

## SK-11

調査区北側の西側斜面にあり、径112cm～166cm、深さは最深部で14cmである。

## SK-12

第3郭西側にあり、かつて肥料とするために糞尿を溜める目的で使われたものと思われる。

第1表 溝状造構計測表

溝状造構（第1表、図版第10c～11b）

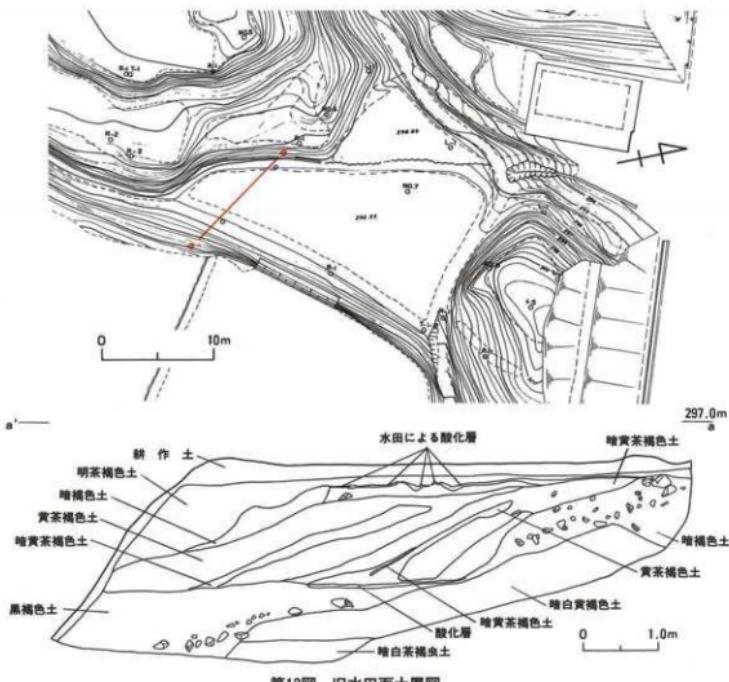
第1郭及び第3郭で溝状造構を検出した。

出土遺物はなく、性格は不明である。

旧水田跡（第13図、図版第11c）

郭状造構下部の堀切状造構は水田となっており、耕作土の下は大部分が地山である。しかし、調査区東南部に一部土を埋めた跡が認められ、土を除去すると現在の水田面の約1.5m下に平坦な黒褐色土層を検出した。旧水田跡と思われる。

土層を観察すると旧水田面下も埋め土であり、さらにその土を除去すると大きな落ち込みとなっていた。周囲は良質なマサ土の地盤であり、マサ土を採取した跡と思われる。



第13図 旧水田面土層図

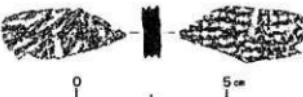
## b. 出土遺物

出土遺物は近世の陶磁器が主であるが、須恵器、墓標石そして五輪石も出土している。また、住民の生活廃棄物の捨て場となっていたようであり、現代の陶磁器片やガラス片が多くみつかっている。

以下それぞれについて説明する。

### 須恵器（第14図、図版第12a）

第5郭から須恵器片が出土した。破片であるため形状等は不明である。色調は灰色を呈し、外面は格子状の叩き調整痕、内面には同心円状の叩き目が残っており、古墳時代後期のものと思われる。

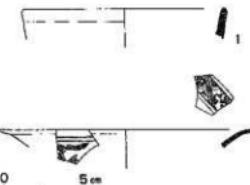


第14図 須恵器実測図

### 中国製磁器（第15図、図版第12b・c）

調査区内で2片の中国製磁器を採取した。1は青磁口縁部の破片であり、内外面とも緑灰色を呈している。釉薬部分が厚く、厚さ5mmの内2mmが釉薬である。15世紀明時代のものと思われる。

2は染付皿の口縁部の破片である。口縁端部付近で厚さ約2mmと、非常に薄く仕上げている。16世紀明時代のものと思われる。



第15図 中国製磁器実測図

### 陶器

陶器は大別して肥前系と地元窯（石見焼）に区分される。時期的には近世前半のものが数点あるほかはすべて近世中頃から後半にかけてのものである。

### 肥前系陶器（第16図、図版第12d～13b）

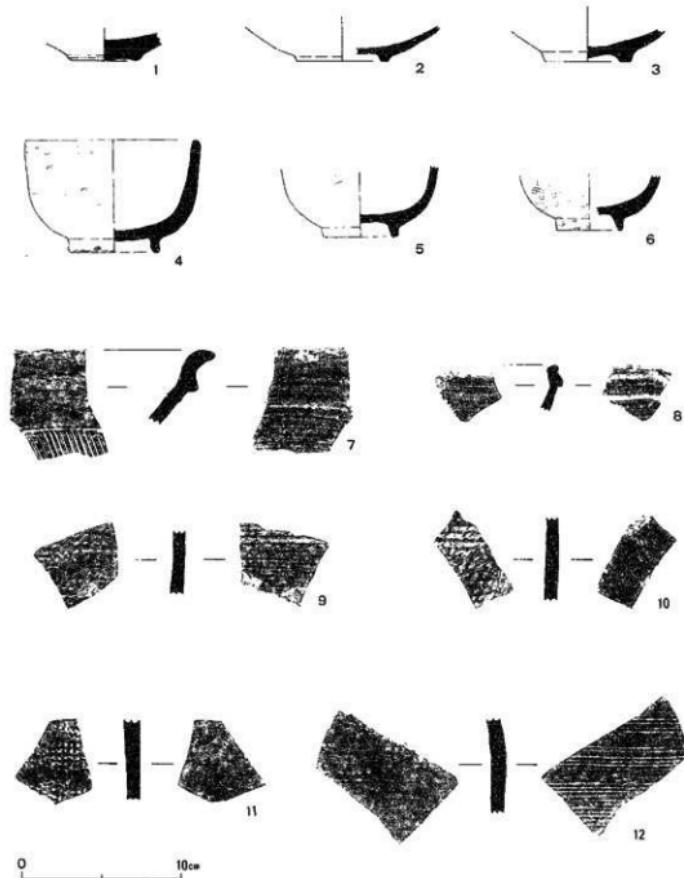
1, 2, 3とも底部だけの川土のため器種は不明であるが、いずれも時期は17世紀と思われる。1は内面にわずかに光沢のある灰白色の施釉がなされている。外面底部は施釉されず黄褐色を呈しているが、外面上部は内面と同じように施釉されており、体部は内面と同じ施釉がなされていたと思われる。見込みに胎上目痕が残る。2は内面と体部外面に光沢のある施釉がなされている。見込みに胎上目痕が残る。3は見込みに4ヶ所砂目痕が残っている。内面及び体部の外面は施釉されているが、外面底部には施釉されておらず、赤褐色を呈している。底部は回転糸切りで切り離した後、底面中央部を削って高台を作っている。

4, 5, 6はいずれも18世紀の碗である。4は高台底部接地面を除き全面施釉されているが、釉薬には全面に貫入があり、ところどころ気泡が抜けたと思われる穴がみられる。5は高台接地面を除き全面に施釉され、細かい貫入がみられる。釉薬に微量の砂が含まれている。6は高台接地面を除き全面に施釉され、高台に付着物がある。高台は底部を除き暗オリーブ色を呈しており、体部は縞状に灰色と暗オリーブ色を呈している。

7及び8は擂鉢の口縁部と思われる。7は内外面とも茶褐色を呈し、体部内面上部に1条の沈線または凹線が引かれている。口縁端部は大きく外反し、外面には貼り付けまたは削りだしによる突起が設けられている。8は口縁部が折り返しまたは粘土貼り付けにより肥厚している。全体として

は茶褐色であるが、口縁部に一部暗オリーブ灰色の釉が付着している。

9,10,11及び12は大型の壺の一部と思われる。9,10及び11の内面にはよく叩き目が残っている。9の外面にはカキ目が施され、さらに1条の凹線もみられる。11の外面には薄く釉が流れているのがわかる。12は外面にはカキ目が施され、内面は叩き目痕をなで消しているが、わずかに痕跡が残っているのがみえる。

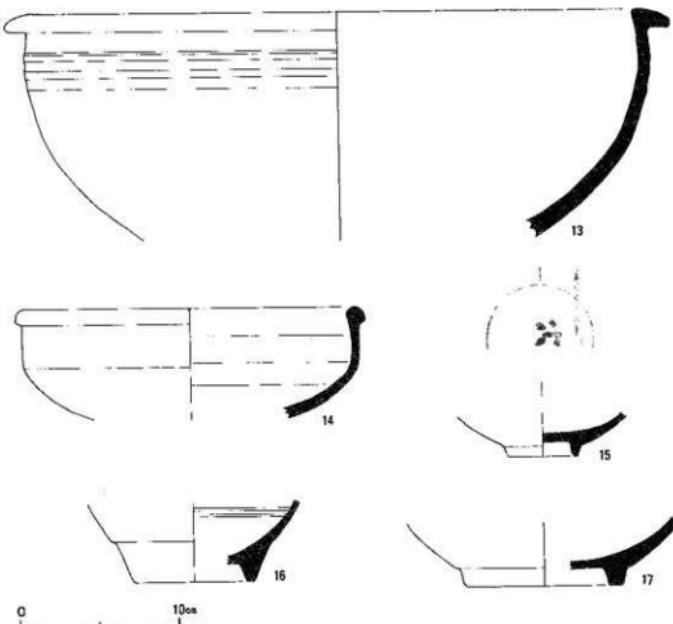


第16図 陶器（肥前系）実測図

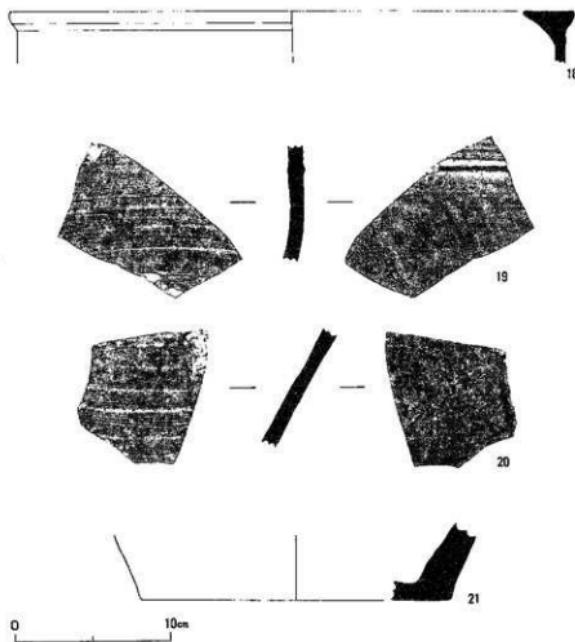
石見焼（第17・18図、図版第13c～14a）

13はこね鉢である。内外面とも光沢のあるオリーブ灰色を呈している。紐状の粘土を積み重ねた跡が残り、特に外面上部には顯著に残っている。口縁部は折り返しまたは粘土の貼り付けにより逆L型になっている。14は鉢である。内外面とも施釉され、オリーブ黄色を呈している。釉には貫入がみられる。15は皿である。高台内部及び底部を除き、施釉されて黄褐色を呈している。釉には全体に細かい貫入があり、見込み部に蛇の目釉剥ぎがみられる。16は徳利である。高台接地面を除く全体に施釉され、外面には貫入がみられる。外面及び内面体部はオリーブ灰色、内面底部は明青灰色である。17は鉢で、内面は黒褐色を呈している。外面残存部分は施釉がなく黄褐色であるが、上部に黒褐色の釉が付着している。

18から21は大型の甕の一部である。18は甕の口縁であり、端部を折り返しまたは粘土の貼り付けにより肥厚させている。口縁上面に平坦面を作り、その平坦面に2.1cmの幅でなで調整を施している。19,20は甕の体部である。19は内外面ともなで調整が施され、暗赤灰色を呈している。外面には突帯状のものがあり、その横に2条の横線が引かれている。20は両面とも暗赤灰色を呈し、内面には紐状の粘土を積み重ねた跡がよく残っている。21は甕の底部である。全面に施釉され、暗赤灰色を呈している。内面に叩き目がみられる。



第17図 陶器（石見焼）実測図(1)

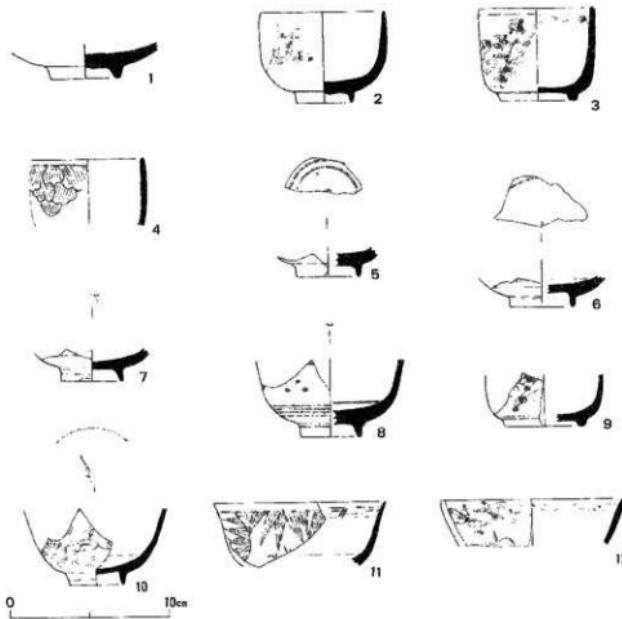


第18図 陶器（石見焼）実測図(2)

#### 磁器（第19図、図版第14 b）

出土した磁器はすべて18世紀から19世紀にかけての肥前系である。

1は高台内部を除く全面に施釉されている。見込みに蛇の目剥ぎがみられる。2及び3は碗で、高台底部を除く全面に施釉されている。4は碗で底部が失われている。口縁端部上面に茶色の釉薬がかかっている。5から10は碗の底部である。5は見込みに2条の園線があり、中央には紋のようなものが描かれている。6は高台外面に3条の園線がある。7は見込みに1条の園線があり、中央に紋のようなものが描かれている。8も見込みに1条の園線があり、中央に紋のようなものが描かれている。体部外面下部に4条、高台外面に1条の園線がある。9は外側体部と高台の境界部に2条の園線がある。10は釉薬の厚さにむらがあり、釉の厚い部分は白濁して一部下の絵がみえなくなっている。見込みに1条の園線があり、中央に紋のようなものがある。また、外側体部の下部には数条の園線、高台には1条の園線がある。11及び12は碗で底部が失われている。11は見込みに1条、内面口縁部に4条の園線がある。12は口縁部内面に2条の園線がある。



第19図 磁器実測図

#### 瓦 (第20図、図版第14c)

調査区内から数点の瓦が出土し、そのうち段状遺構から出土した3点を図示した。1は裏面、瓦尻、表面の瓦尻寄りには施釉がなく、施釉された部分は赤灰色を呈している。また、この瓦の施釉部には光沢がなく、他の瓦とは明瞭な差がある。2及び3は色調はいずれも暗赤褐色を呈し、施釉部には光沢がある。

#### 海鼠瓦 (第20図、図版第14c)

海鼠壁に使われることから海鼠瓦と呼ばれているものである。色調は両面とも暗青灰色を呈している。隅部には釘穴があり、漆喰の接合を強化するために側辺寄りに条線が引かれている。

#### 墓標石 (第21図、図版第15a)

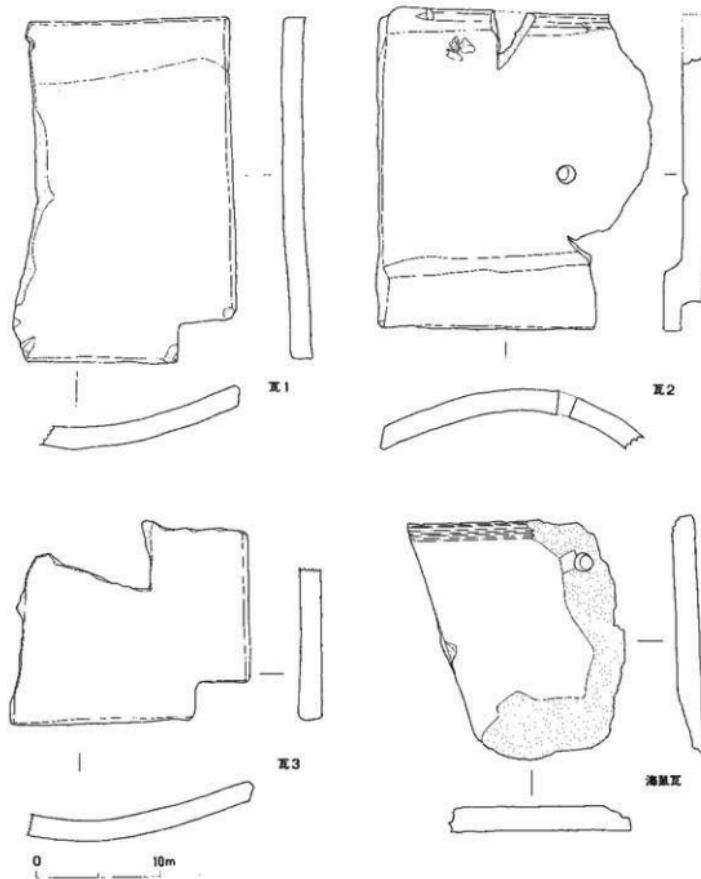
第1郭南東端部から斜面をやや下がったところから江戸時代の墓標石が出土した。川土地点の下に墓穴が確認できなかったので、築造後に動かされた可能性が高い。

墓標石は河原石を利用しており、正面に「享保十一年釋教順 十一月一日」の刻銘がされている。また、側面には被葬者の名前が刻まれており、「俗名□左エ門」と読める。

五輪石（第22図 図版第15 b）

第4郭東端部から五輪塔の一部が出土した。出土したのは五輪塔の風輪と空輪の部分であり、1個の石に空輪部と風輪部を加工している。石全体の高さは20.8cmであり、中央部よりやや下が直径9.2cmと大きくくびれて空輪と風輪に分かれている。空輪部は高さ12.3cm、直径14.6cm、風輪部は高さ8.5cmで直径15.3cmである。梵字等の刻印は確認できなかった。

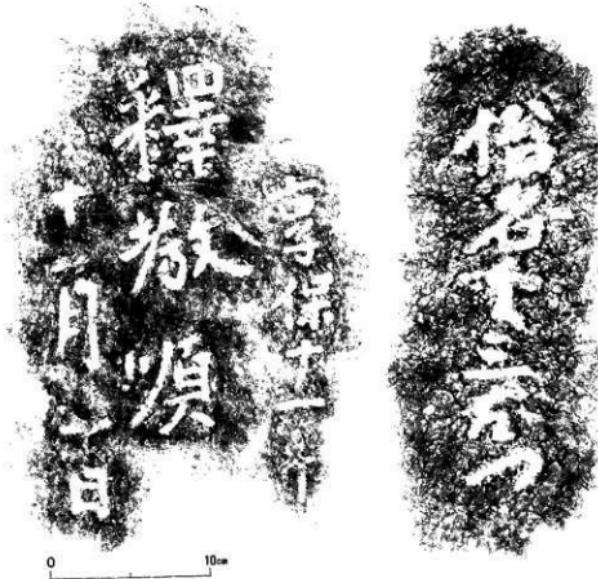
（藤田睦弘）



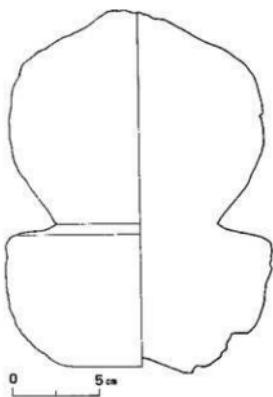
第20図 瓦及び海鼠瓦実測図

墓標石正面

墓標石側面



第21図 墓標石拓本



第22図 五輪石実測図

## IV.まとめ

今回の発掘調査では中世の城跡（堀越城跡）の他、近世の墓も確認することができた。さらに須恵器片が出土したことから古代にも何らかの人の営みがあったことを確認できた。

### 1.古代について

今回の調査で確認できた古代の遺物は須恵器片1点のみである。しかし、本遺跡は古代の集落跡として知られる順原遺跡や長尾原遺跡が所在する出羽川南部の河岸段丘上に位置しており、周囲にも滑道跡や川ノ免遺跡など小規模な集落跡があることからも、かつて何らかの造構があったと考えることは容易である。おそらく中世に城を築く際に破壊されたのであろう。

### 2.堀越城跡について

今回の調査では築城者や築城年代を明らかにすることはできなかったが、城の造構と考えられる郭状造構や通路状造構、堀切状造構を確認した。この他、近世陶磁器に混ざって15世紀と16世紀の中国製磁器が出土しており、これらが堀越城に関わる遺物である可能性は否定できない。

この城の特徴は川の近くの比高10m程度の尾根の先端部に築城している点である。河瀬氏の山城分類によればこのような特徴を持つ城は上居型式に区分され、鎌倉時代後期にこの種の城が多いとされている。また、近隣町村の調査類例を探すと、広島県千代田町の小奴可城跡の特徴が比較的似ている。小奴可城も比高5m程度の尾根の先端部に作られており、堀切により独立した格好になっている。調査の結果15世紀から16世紀の中国青磁が出土し、この時代に使用された城とされている。

しかし、城の特徴の類似から時代を特定することは困難であるので、ここでは中世の城であるということにとどめたい。

また、今回調査した城跡については文献も伝承もないでのこの城の性格は分からない。しかし、調査区からは中世山羽氏の居城であったといわれる宇山城跡群や二ツ山城跡、高橋氏の居城であったといわれる本城跡を眺望することができることなどを勘案すると、今回調査した城跡は敵の城の観察や味方の城との通信、そして交通の監視等の目的を持って作られた城と考えられる。

### 3.古墓について

今回検出した12基の土坑のうち、SK-01、SK-02、SK-03、SK-04、SK-05及びSK-09の6基が土坑墓であると思われる。

調査区内から見つかった幕標石に享保11年(1726年)の記述があり、18世紀前半には本調査区周辺が墓地であったと思われる。

墓坑の平面形から分類すると、円形と方形に分けられ、SK-02及びSK-03が円形に分類され、方形に分類されるのはSK-01、SK-02、SK-04及びSK-09である。さらに出土遺物から区分すると、鉄釘の山上と覆土からの石の山上の有無で区分できる。鉄釘が出土したのはSK-01、SK-03、SK-04及びSK-09であり、石が出土したのはSK-01、SK-05及びSK-09である。特徴からみると、平面形にかかわらず釘は出土しているが、覆土から石が出土したのは平面形が方形のものである。

埋葬方法について、那賀郡旭町の後河内古墓群の調査では円形の墓坑は棺桶を納めたものと考えられ、方形のものは組み合わせ式木棺を用いたものか直接埋葬したものと考えられている。今回検出の十坑の場合は墓坑の形に関係なく鉄釘が出土しており、墓坑の形状と埋葬方式に明確な相関関係を見つけることができなかった。さらに同古墓群の調査では墓坑の形状の変遷について長方形または方形の墓坑を有し、組み合わせ式木棺を用いたものから円形の墓坑で棺桶を納めたものに推移していくと考えることもできると指摘されているが、本遺跡では墓坑内から年代を特定できる遺物を確認できず、この点についても考察を深められず残念である。

前述の後河内古墓群ではすべての古墓上に集石が確認されている。本遺跡においてもSK-09上に集石が認められたほか、SK-01及びSK-05も覆土中に石を確認できた。現代の一般家庭の墓は墓標石の使用が一般的であるが、古い墓については石を集めて墓の日印としているだけのものの方が多く、この形が当地方の近世墓の一般的な形状であると推定される。

ここで問題となるのが享保11年の記述を持つ墓標石である。当地方の近世墓の変遷についての資料は残っていないが、福岡市の席田青木遺跡の発掘調査例によるとこの種の墓標石の出現は17世紀後半からである。同遺跡でも享保10年代の墓標石は古い部類に属し、単純に比較はできないが今回出土した墓標石も墓標石が使われたして早い時期のものということができる。

#### 註

- (1). 河瀬正利「広島県における中世山城跡について」『芸備地方史研究 第110,111合併号』1977年。
- (2). 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『小坂町城跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第73集 1983年3月。
- (3). 島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 III』1991年3月。
- (4). 福岡市教育委員会『席田青木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集 1993年10月。



# 図 版



図版第1

a. 調査区全景  
(上空から)



b. 調査区遠景  
(東から)



c. 調査区近景  
(南から)



図版第2

a. 堀越城からニツ山城跡  
及び本城跡方面を望む



b. 堀越城跡から  
宇山城跡群方面を望む



c. 堀越城跡から南を望む



図版第3



a. 東側郭（南から）



b. 西側郭（南から）



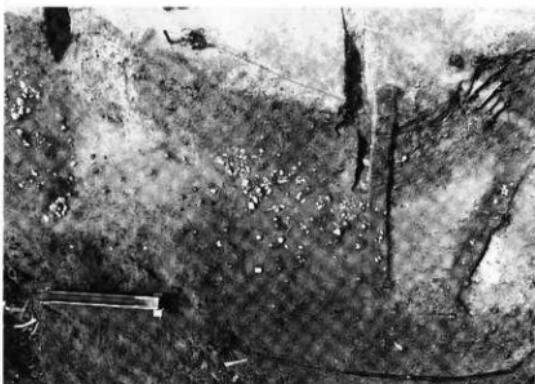
c. 第1郭及び第5郭  
(北西から)



a. 第11郭及び切岸  
(東から)



b. 第4郭河原石分布状況  
(上空から)



c. 同 (同)

図版第5



a. 第8郭土層（北から）



b. 堀切状造構（南東から）



c. 石積造構  
(第2郭西側斜面)  
(北西から)

図版第6

a. 石積造構  
(第5郭北側斜面)  
(北から)



b. 通路状造構  
(第1郭第2郭境界部)  
(東から)



c. 同 (第3郭西侧)  
(北東から)



図版第7

a. 通路状造構(第3郭東側)  
(北西から)



b. 同(同)  
(南東から)



c. 同(調査区北端部)  
(東から)

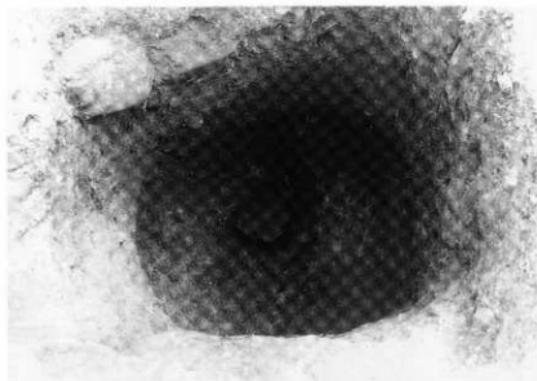


図版第8

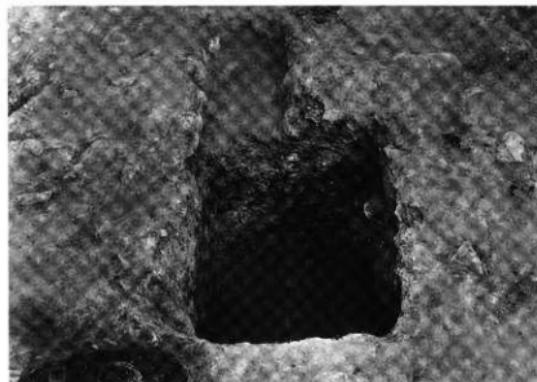
a. 段状遺構  
(南から)



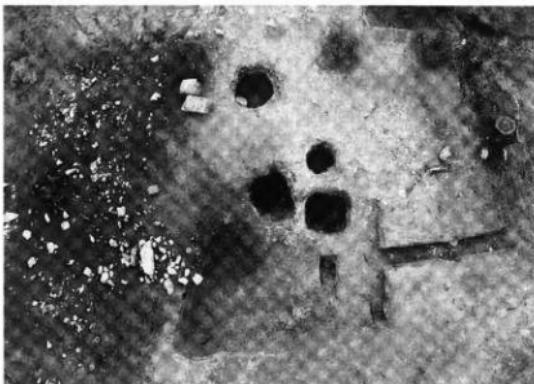
b. SK-01(頭骨出土状況)  
(西から)



c. 同(完掘状況)  
(南から)



a. SK-02～SK-05  
(完掘状況) (上空から)



b. SK-07  
(同) (北から)



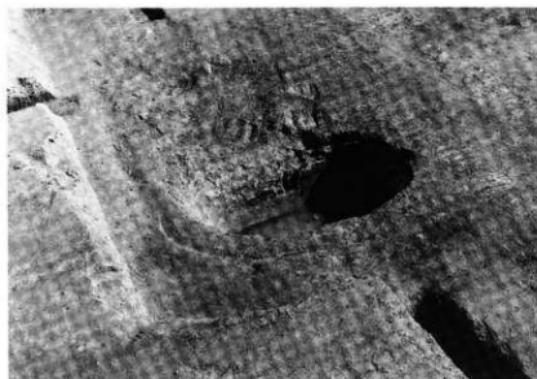
c. SK-09・SK-10  
(同) (南から)



a. SK-11(完掘状況)  
(東から)



b. SK-12(同)  
(南から)

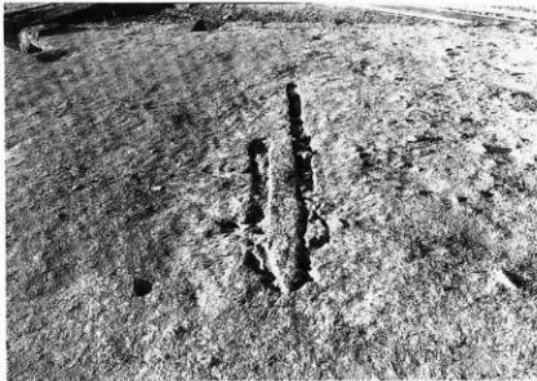


c. SD-01(同)  
(東から)

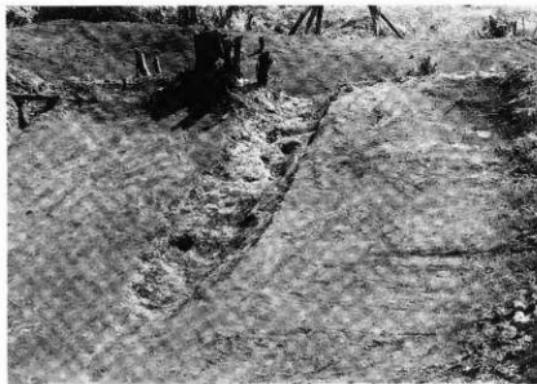


図版第11

a. SD-02・SD-03(完掘状況)  
(南から)



b. SD-05 (同)  
(西から)



c. 旧水田面検出状況  
(北西から)

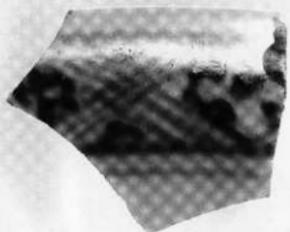
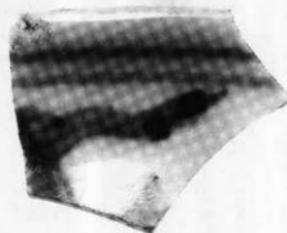




a. 須恵器



b. 中国製磁器 1



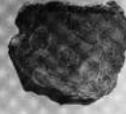
c. 同 2



1

2

3



1

2

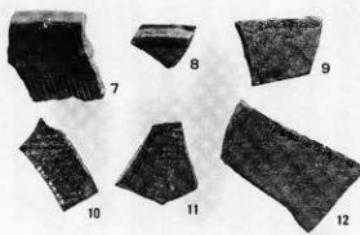
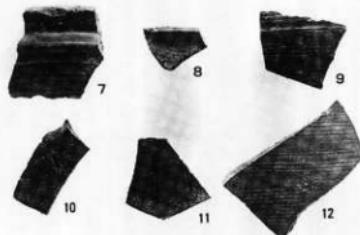
3

d. 陶器（肥前系）

図版第13



a. 陶器(肥前系)



b. 同

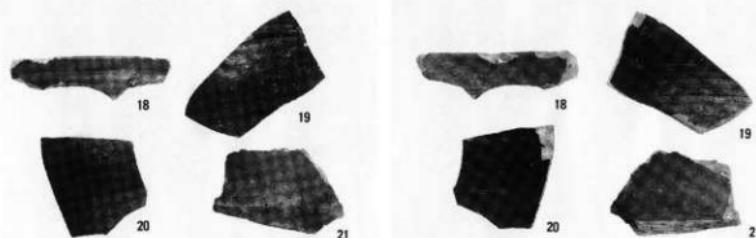


c. 陶器(石見焼)

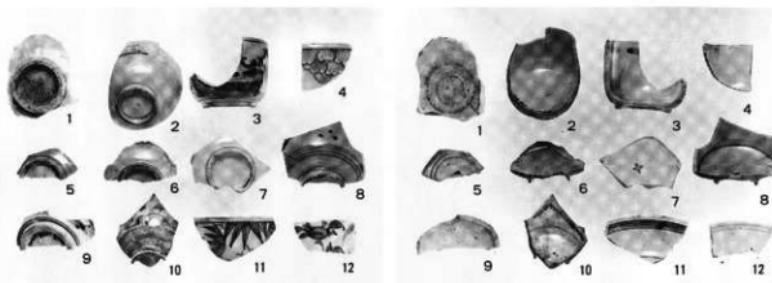


d. 同

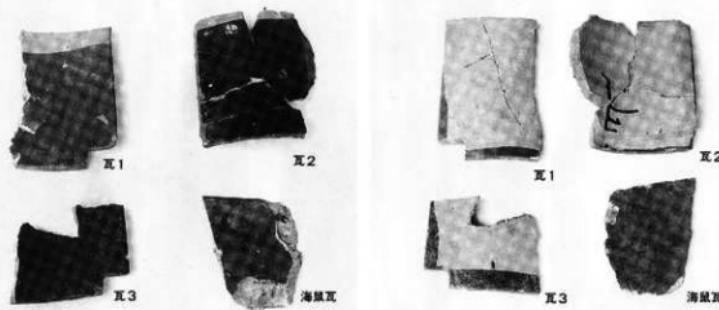
図版第14



a. 陶器（石見焼）



b. 磁器



c. 瓦及び海鼠瓦



a. 墓標石検出状況



b. 五輪石



c. 現地説明会の様子

# 報告書抄録

ふりがな	けいこうぼういせき(ほりこじょうあと)はくつちょうさほうこくしょ
書名	慶光坊遺跡(堀越城跡)発掘調査報告書
副書名	主要地方道吉田瑞穂線改良工事に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	瑞穂町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	藤田暉弘
編集機関	瑞穂町教育委員会
所在地	〒696-03 島根県邑智郡瑞穂町大字三日市32番地 Tel08558-3-1121
発行年月日	西暦 1995年3月31日

所取遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	地番					
けいこうぼういせき 慶光坊遺跡	しまね おおち みずほ やまだ 島根県邑智郡瑞穂町大字山田	32445		34度 51分 20秒	132度 33分 00秒	19940516～ 19941031	3600	道路改良工事
ほりこじょうあと (堀越城跡)								

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慶光坊遺跡 (堀越城跡)	城跡 古墓	中世 江戸時代	城跡 1ヶ所 古墓 6基	中国製磁器 肥前系磁器 肥前系陶器 石見焼(陶器) 墓標石	15,16世紀の中国 製陶磁器が出土 享保11年と刻銘 された墓標石が 出土

平成7(1995)年3月

島根県邑智郡瑞穂町

慶光坊遺跡(堀越城跡)  
発掘調査報告書

主要地方道吉田瑞穂線改良工事  
に伴う発掘調査

編集・発行 島根県邑智郡瑞穂町教育委員会  
印 刷 柏村印刷株式会社